日本書紀傳　廿六卷之二

和書
一〇五二二號

リ十四

内閣文庫
番號　和　10522
冊數　156（93）
函號　特　85　1

内一二六八二号

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

文部省
文庫印

内一二六八三號

附録

古事記曰須佐之男命又娶大山津見神之女名神大市比賣生子大年神次宇迦之御魂神二柱宇迦二字以音故其大年神娶神活須毘神之女伊怒作怒非比賣生子大國御魂神次韓神次曾冨理神次向作白非日神次聖神五神又娶香用比賣此神名以音生子大香山戸臣神次御年神二柱又娶天知迦流美豆比賣訓天如天亦自知下六字以音生子奥津日子神次奥津比賣命亦名大戸比賣神此者諸人以拜竈神者也次大山上咋神亦名山末之大主神此神者坐近淡海國之日枝山亦坐葛野之松尾用鳴鏑神者也次庭津日神次阿須波神此神名以音次波比祇岐神此神名以音次香山

戸臣(戸)(臣)神次羽山戸神次庭高津日神次大土神亦名土之御祖神九上件大年神之子自大國御魂神以下大土神以前幷十六神

此ハ甚止事無き神等の傳あるを御紀ハ記し漏されてあり有けるを然るに心行き難き事あるも多くめれば此註して此素戔嗚大神の天下國土ハ比類無き大御功御在し坐す大神ハ渡らせ給へる御事ハ次々ハ説明らめ奉るを其最大あるハ傳せ三二百九十七丁ハ注せるが如く此大神をしも出雲風土記ハ國引坐八束水臣津命と称奉り欽明天皇御紀ハ建邦之神と称奉る事傳せ四十丁ハ説奉るが如し但其ハ二柱御祖神の滄海原潮之八百重を所知せと事依し授奉らせ給へる御命の任ハ從奉らせ給へる是ハり斯るハ此大神其始天津罪を犯させ御在し坐ける故ハ天照大神の石戸隠の御事有り其罪ハ依て諸神ハ解除を徴られ奉られさせ給ひて國土ハ逐ハれ給へる以來吾心平安しと詔給ひ吾心清々しと言出給ふ許ハ御心平らぎ御在し坐て唯國土人民ハ幸給ふ可き衣食住の事を大ハ弘め起させ給ふとして御子神を餘多ハ生奉らしめ給へり故其后神を娶給へる

事合せて三柱ありき其始天上ふて娶らせ給へるハ
即大夜之女命ふして五十猛命等の御祖ありき次ふ
出雲ふて娶らせ給へるハ奇稲田姫命ふして大己貴
神の御祖ふ坐て終ふ娶らせ給へるなむ神大市比賣
命ふ坐て即此の大年神の御祖神ふて坐ける然るふ古
事記ふハ其(同)櫛名田比賣命と神大市比賣命と二柱
の后神の御事ハ詳ふれども五十猛命の御事ふ於て
ハ唯木國之大屋毘古神と一所出たるのみふして御
祖神の御事も何も傳ハらぬを御紀ふハ五十猛命の
御事ハ詳ふ傳ハりて甚愛たくハ有れども其御祖
を漏されたる故ふ長寛勘文を以て此を補ふ可し然
りと雖も此神大市比賣命の御事及其御子神等の御
子ハ皆がらふ古事記ふ委ねて載らるるなむ事闕
たりと云べりける此予此附録を著ハす所以なり然るハ先其大夜之女命ふ

御合坐しハ其御子をして大八島國内悉青山と成し
給ひて家居を建る事を起させ給ハむとなり是即大
八島國内悉ふ人民の家居を陳列ねらめ給ハむ神策
ふして空しく青山ふ繁木の生立つ事ふのみ係て云
べき所ふハ非るなり次ふ奇稲田姫命ふ御合坐しハ
其御子をして天下を經營らしめ給ひ國土人民を令
治給ハむ神策ふして其も唯ふ國土を作固むるのみ
ならず人民を生し蕃息し給ふ可き御政是なり次ふ
此神大市比賣命ふ御合坐けるハ其御子をして稲穀
を作らしめ農作の方を開き給ひ天下ふ火食の道を

弘めて蒼生を養育させ御在〻坐むとふて唯其生坐る神ふ自然ふ其德の備ハり坐るふハ非ず其德の正ふ御在〻坐べき神を今生給へるふて實ふ素戔嗚大神の恩頼ふ出たる事申すも更なる御事なりけれ然バ此三柱の后神等の御子神等ハ何れを一柱と雖も除き奉る可きなるぬ甚止事無き神ふ渡〻せ給へれバ予此ふ於て例の説奉くむとす然れども其想てを申す時ハ素戔嗚大神一柱の御德を分て諸の御子神等と成別り坐〻又諸の御子神等の御德を合せて素戔嗚大神の御德ふ歸する者なりカを入て説奉くず ハ得有まじく ○要大山津見神之女名神大市比賣ハ已なむ有ける ふ傳せ三三百一丁ふ注せり偖此大神と女神と相並び御在〻坐すハ神名式ふ山城國紀伊郡稲荷神社三座並名

神大月次新嘗ど有る其社記ふ中倉稲魂命即素戔嗚尊子母山祇女大市姫伊弉諾尊子同名云云上進雄尊下大市姫以上三座神是尤秘中深秘也ど有る是なり此御社の御事傳十三十六丁ふ已ふ註せるを此ハ其御妹妹神共ふ相並ばせ御在〻坐す事を明〻奉る爲ふ此ふも又更ふ擧なるなり又神名式ふ近江國野洲郡小津神社頭注ふ宇賀魂命ど有り神社啓蒙諸社一覽等ふ玉津正一位小津社宇賀魂命也社家註進狀云大宮本縁同上二宮素戔嗚尊三宮大市姫命也ど有て祭る所右の稲荷神社ふ同〻又式外なが〻遠江國郡横須賀神社ど申す有り高松社ふ

笠社横須賀社以上三社なり神社啓蒙ハ社家注進云
文武天皇大寶元年秋九月奉遷此所也高松社者大市
姫命ハ笠社者素戔嗚尊也横須賀社者熊野櫲樟日命
也素戔嗚尊子と有り此小笠社と申すハ社号なり〻ハ此
大神の亦御名ハ御在〻坐するる可〻其ハ傳せ二百
十ハ注せるが如く寶鏡開始章第三ノ一書ハ乃共逐
降去于時霖也素戔嗚尊結束青草以爲笠蓑而乞宿於
衆神下略と有る此故事ハ依て大蓑彦神と申奉ハ並び
て小笠神と申奉るも實ハ似者ハ〻き御名ハハ御
在〻坐りける又神名式ハ伊勢國安濃郡大市神社有
ハ此女神ハて渡〻せ給へるやや今其

口又此ハ熊野櫲樟日命の並坐る意ハ謂れ有り古事記ハ故其大手神ハ神活須毘神之御
妹比賣之者ハ今是ハ大手神宇迦之御魂神同神なる似も傳十五三百九十一丁見合す可〻

大山祇命也

傳詳〻なるなり右等の傳〻を合せて古事記ハ
謂ゆる宇迦之御魂神と申す御子神の御在〻坐す御
事を先明〻め置て次ハ云る事共を考合す可〻○大手神ハ次ハ出給へる宇
迦之御魂神とハ本一神の御名なるを二柱ハ分れ傳
ハれるなり其由ハ已ハ傳十三十九丁廿三三百一丁ハ委〻く
辨へたるが今も目易〻〻も爲ハ少〻云むハ公倭姫
命世記ハ土御祖神二座宇加之御魂神土乃御祖神と
有を上代本記ハ素戔嗚尊孫大土御祖神一座太田
命一座宇賀御魂大手神一座と有て此ハてハ三座な
れども太田命一座ハ其從祀(アヒヒ)なるとなりけるが一ハ混
れたるゆて其實ハ二座なりけるハ此ハハ世記の宇

先管ハ皇天神宮儀式帳ハ薦原神社大歳神兒佐津比古命形石坐又宇加乃御玉御祖命形無之者其佐津比古命天歳神と云ハ次ハ出たる御祖命ハ其后神なる可きハ宇加乃御玉と申せるハ正〻同神なる證なる事ハハ大歳御祖命と申せるハて知べし又右ハ云る横須賀社の注進ハても同神の事ハ甚と明るきを思ハ次ハ又

加之御魂神を宇賀御魂大年神として二名を重ねて一神の御名なる是同神の證なり偖古事記ハ大年神の御子大土神亦名土之御祖神と有を上代本記ハ宇賀大土御祖神素戔嗚尊子也と云り土御祖神ハ素戔嗚尊の御孫なるを御子と云ハ其御父ハ係れる事なるゞ上ハ宇賀と冠らせ奉れるハ宇賀御魂神の子大土御祖神なる由ふて此を古事記ハ合する時ハ大年神即宇迦之御魂神ハ御在〻坐る證なり又古事記ハ大年神と宇迦之御魂神と二柱を並擧れたるハ其大年神ハ后神も御子神も許多御在〻坐ハ宇迦之御魂神ハ后神も御子神も一柱だハ見えさせ給ハざるハ不審〻〻き事なり此を以て誰〻も其疑の出来るゞ故ハ四神出生章第六之一書ハ又飢時生兒号倉稲魂命と有ハ片著て此大市比賣命をして令生給へる宇迦之御魂神を錯出とさへ思ふ事と成ぬるハ甚と可惜〻〻き事なり柳此大年神と申奉るハ其農作の方ハ取て御名ハ負坐〻又宇迦之御魂神と申奉るハ其穀種の方ハ就て御名ハ負分り坐るハこゝ有けれ元一神ハ御在〻坐を以て宇賀御魂大年神とも御名と重ねても称奉れるなりけり但神名秘抄ハ土宮三座として大年神一座宇迦魂

神一座土御祖神一座と有て此ふて八二神の如くなり然れども一神を亦名ふて二神ふ祀る例八三輪ふて大物主神と大己貴命を別座さ一大和ふて大國魂命と八千戈神とさを別座ふ祀るが如くして予が常ふ云事なるが凡て神の御上ふ亦名も云事の御在一坐八別なる御功用の御在一坐を以て称ら事ふて人ふ[本ハ]已ふ別人とも云程の差別有る事なるが故なり所以て同ト神ふハ渡らせ給へれども上ふ云る稲荷神社小津神社の如きハ宇迦之御魂神と申奉る方の御霊を祀り又諸國ふて大歳神社ふて祭るハ本ら大年神の方ふて已ふ別神の如く見え名義ハ記傳九させ給へるハ全く御功用の差異なり名義ハ記傳九五十一丁ふ大ハ例の称名年ハ田寄(タヨシ)なり然云故ハ先登志と八穀(タツモノ)の事なる其ハ神の御霊以て田ふ成一て天皇ふ寄奉り給ふ故ふ云り田ふ寄すと云義ふて穀を登志と八云なり祈年祭詞ふ皇神等能依左志奉年奥津

御年乎乎肱ふ水沫畫(畫)垂向股ふ泥畫寄氐取作年奥津御年乎八束穂能伊加志穂ふ皇神等能依左志奉者と有を以知べ一天下ふ成と一成る穀八悉く天皇ふ神の依一奉給ふなるを云り偖穀を一度取收るを一年と八云なり然れば登志と云名八穀を本ふて年月の登志八末なり様要と云れたるが實ふ盡されたる説なりける右の田寄の説ふ就て思出けるく八天孫本紀ふ天火明命十六世孫ふ尾張多與志連大海部直等祖と云事有り其尾治八尾張國なるが傳世五巻三十四丁尾張の名義を説る一説ふ尾張ハ小壑なり續紀ふ尾張國山田郡人従六位下小治田連藥等八人賜姓尾張宿祢と見え万葉十三巻ふ小治田之年魚道之水乎と有なるが尾張ハ小治田の田字を略けるなり然一て多與志と云るハ田寄の義ふて其壑田の事ふ因れ

り此ハ然しも此ふ引べき事なれども鈴屋大人の年を田寄るりと云れたる事實ふ神の如くして深く感け思ふ故ふ云なり故其詞ふ御年皇神等能前尓白久皇神等能依左志奉年と有る等字を以て考ふるふ此大年神と御子御年神御孫若年神と三神を合せ祀れるふて各同德の御神等ふ渡らせ給ふ事申すも更なり若て大倭神社注進狀ふ御歳神者守護禾穀神也と有も右の三神ふ亘れる御事ふて其證ふハ下ナ丁ふも引る古語拾遺ふ昔在神代大地主神營田之日以牛宍食田人于時御歳神之子至於其田唾饗而還以狀告父御歳神發怒以蝗放其田苗葉忽枯損似篠竹於是大地主神令片巫志止二鳥肱巫及来占也占求其由御歳神爲祟宜獻白猪白馬白鷄以解其怒依教奉謝御歳神答曰實吾意也略中仍從其教苗葉復茂年穀豊稔略と有て其御子神の其事ふ預らせ給へるを以て御父大年神ハ殊更なる御事ふ渡らせ給ふを見奉り知べくなむ有ける右の如く蝗の爲ふ苗葉の枯損へるも年穀の豊稔なるも皆此神等の御心ふ因れるを以て登志の義を釋て田寄と云りなれるなむ實ふ尤なる説とハ云なりける此を以て見るふ右の三柱坐る中ふ其主と御在ー坐ハ御年神ふ御在ー坐て大年神ハ御父ふ御在ー坐を以て大と称奉り若年神ハ御子ふ坐故ふ若と称申せるふて其御父羽山戸神ハ即御年神ふ御在ー坐る所由ハ

下二百七十丁ニ云を
思合せ曉る可し又倭姫命世記に垂仁天皇二十七
年戊午秋九月鳥鳴聲高聞て晝夜不息置此異止宣て
大幡主命舍人紀麻良止差使遣令見彼鳥鳴處罷行見
波島國伊雜方上葦原中在稲一基生本波一基仁爲て
末千穗茂也彼稲白眞名鶴咋持廻作鳴支此見顯世波其
鳥鳴聲止支止返事申支尓時倭姫命宣久恐志事不問奴
鳥須良田作皇太神奉物乎止詔て物忌始給て彼稲伊佐波
登美神乎爲て抜穗尓令抜て皇太神御前懸久眞尓懸
奉始支則其抜穗大幡主女子乙姫尓清酒令作御饗奉
始支千税奉始事因茲也彼處稲生地千田止号支在島

國伊雜方上其處伊佐波登美之神宮造奉皇太神爲攝
宮伊雜宮是也彼鶴眞鳥乎号称大歳神同處祝比奉也
又其神皇太神之坐朝熊河尻後之葦原中石尓て坐彼神
小朝熊山巓社造奉祝令坐大歳神称是也と見えたる
此(是謂ゆる)神嘗祭の本あるか志摩國の伊雜の上方なる人
跡絶たる所小稲を生して皇太神小寄奉るもとして
其鶴の飛廻り鳴つるか意を得て令見給ひしかば
其聲止たりければ此尓(其伊佐波登美神として)伊雜宮として皇太神の遥宮を
仕奉らしめ又其鳥を大歳神と号けて同處小令祀給
へりとあり此(歳)も例の田寄の義ふて唯其鳥小然る名

を今称給ふが如しと雖も神代ふ名高き大年神の御
在し坐す上ハ外ふ号けさせ給ふ方も有むと然大歳
神と称させ給へるハ其鶴ふ云事ふくず其千穂の稲
田を皇太神ふ寄奉る即大年神代の神の御事と為て其稲を
賜りて神嘗ふ今奉給へる者なり斯る例猶多在り左
の細注ふ云べし其鳥を同處祝比奉せハ神名式ふ志
摩國答島坐神手多乃御子神社と有り是なり又其ふ朝
熊ふ社造今奉祝坐と有ハ同式ふ伊勢國度會郡朝熊神社
と見えて即皇太神宮儀式帳ふ朝熊神社一處称神
櫛玉命兒大歳兒櫻大刀自形石坐又苔出神形石坐又

大山罪命子朝熊水神形石坐と有る此大歳神を神櫛
玉命の兒と云ことろ信られぬ此社ふ大歳神の御在し
坐す證是なり然るを傳記本縁なとふ保於止志神と
書せるハ右の世記の故事を悪く見ふ依し後人の唱謬ふる者
なれバ愈以て取べきなり又式ふ湯田神社称
鳴宸電又大歳御祖命と有も生稲實と云事ふて亦名
と聞ゆ又式の朽羅神社を久麻良比神社一處称大歳
神兒千依比賣命と有る久麻ハ稲良ハ助辞比ハ飯な
ら可き事右ふ謂ふ懸久眞の事ふ合ひ又千依ハ稲寄なる可き事傳十四百二十七丁小注る
ふ如し又儀式帳ふ葛原神社大歳神兒佐ゝ津比古命

形石坐又宇加乃御玉御祖命形無又伊加利比女形無
と有る佐こハ下　小云ふ若汝那賣神の汝ふ〜て
稲苗を云ふる可〜次ある伊加利公稲荷ふ合せ
て知べし　偖右ふ大歳御祖命此ふ宇加乃御玉御祖命
と有る二の御祖命ハ其后神ふ坐を御子ふ對へて申
す称あり又加努弥神社大歳神子稲依比女命形石坐
と有る稲依ハ字の如くして右ふ注せる千依ハ稅寄
の義なり故先師の田寄なりと云れたるふ其意同ど
きなり然れば右の世記ふ云る鶴を〜も大歳神と
称給へるふ非ず神田を寄奉れる神の御事なるが其

大神宮行事記
三月例に鍬山伊賀利
神事ゴ云有ハ鍬山其
年田と作る鍬の鍬柄
と採ふ就て神事
あり伊賀利ハ面牧の
事歟なる神事
みて即

も神代の大年神を祀らせ給へる事右の如く后神又
御兒神等をも處こふ令祀給へるを以て知べさなり
但白眞名鶴ハ大年神ふ使ハれ奉る者と見えたり二
十二社注式稲荷神社條ふ引る山城風土記ふ称伊奈
利者秦中家忌す等遠祖伊呂倶秦公積稲梁有富祐乃
用餅爲的者化成白鳥飛翔居山峯生子遂爲社名至其
苗裔悔先過而拔社之木殖家禱祭之と有る是なり豐
後風土記ふも此と同ト云趣有り偖倭姫命の其稲穂
と白眞名鶴の導ふ依り見出させ給へる即大歳神の
御所爲として今祀給へる是上代の意ふて高橋氏文
ふ磐鹿六雁命の景行天皇ふ御贄奉れる時の大御命
ふ此者磐鹿六雁命獨我行波非矣斬天坐神乃行賜倍
留物也と詔給ひて受させ御在〜坐けるとー云ふて大
年神ハ田と寄給ふ神ふ坐を以て其神の行ひ給へる
御事として受さ給へる者なり神名式ふ山城郡乙訓郡大歳神社大月
次新嘗向神社相並び御在〜坐すハ其御父子の御由緒

ムのことゝ見ゆ神須佐之男命ハ出雲國ニ坐シ給ふ說ハ田有リト雖

ムの社記ト見ル河須佐神波比岐神其五座の中ニ御在リ坐リ又同郡

ムの神名帳ニ從五位上大年大神坐澤美郡ニ也有

ムの駿河國安倍郡大歳御祖神社ハ云ふ伊勢の湯田神社の例ニて其ハ后神たる事風土記ニ大歳御祖神社武雷神号五依姫賀茂健角見命之母ニ坐ス事ハ說ハ明ク其女神ニ御在リ坐ス事ハ明ク此御事傳三卷ニ見ヘタリ

ムの代實錄ニ貞觀十三年四月三日授石見國正六位上大歳神從五位下

攝津國住吉郡草津大歳神社攝津志ニ在苅田村ト云ふ此田ニ由有リ遠江國長上郡大歳神社邑勢神社並坐ル ハ古事記ニ天菩比命之子建比良鳥命遠江國造等之祖也ト有レバ邑勢ハ大背飯三熊之大人ニて大年神の后伊努比賣命の御兄弟ニ坐て由有リ伊豆國那賀郡仲大歳神社ハ其賀茂郡伊豆三島神社名神大月次新嘗ニ坐す大山祇神ハ大年神の外祖父ニ坐す由縁なり但馬國二方郡大歳神社國造本紀ヲ見ルニ二方國造ハ出雲國造同祖なれバ天穗日命ハ大年神の翁婦ニ坐せり然る所以なるトヽ又石見郡那賀郡大歳神社

ある事下百廿二丁ニ合せ說奉るを見て知べし大和國高市郡大歳神社二座御歳神社敬ヲ三所ト云ふ可し古事記ニ大年神又娶香用比賣生子御年神と有る是なり又式ニ和泉國大鳥郡大歳神社鍬和泉志ニ余按國内神名帳草部茅木荒田下大鳥高志取志大庭山田畔田九處有大歳神社不知何式内神社と有て當郡ニ數社御在リ坐ハ故有べし當郡大鳥美波比神社本國神名帳ニ正一位大鳥尓波比神社と有ハ即庭津日神ニ坐す事下十ニ云べし又和泉郡聖神社積川神社五座ハ御子神なる事古事記ニ此所見たるを以て知べきなり

大飯彦神社並坐ル和名抄郡名邑知於保知ハ御祖神
大市比賣命の御名ホ同じく郷名邑知郡神稲久末志呂ハ
此神ホ就て所以有る地名ある事傳十四百二十七丁廿三
三百ホ云る事共と考合す可き者ある右の大飯彦神
一丁ホ御在ル坐る〳〵じり神名式ホ若狭國大飯郡大飯神
社坐る大飯ハ大炊ホ同じく供御の御食と云ふり其
由ハ傳廿二巻八百十七丁多米連の下ホ注せるを
見て知べし右の如く諸國ホ大歳神社數多坐ルハ神
代の故由ホ依れるも又其農の事ホ就て祭れるも
有べきる〳〵其外ホも式外ホも大歳神社と申す多く
有と雖ホ事ホ違非ず　儲大年神ハ〜も禾穀と守護〳〵せ給ふ
甚止事無き神ホ御在ル坐る由ハ右ホ明らめ奉るが
如くなるが抑其禾穀の本ハ〜も保食神の御霊物ホ

リ然れども此を田ホ蒔き種て陪ひ養ふ事ハ〜も
專此大神の御功用ホ係る故ホ其生長收藏の事の始
終有る間を登忘さて即田寄の義ある又其一年を
四ホ分て春と云ひ夏と云ひ秋と云ひ冬と云も又其
稲穀の事ホ係れる称なり又其四季を各三ホ分て一
年十二月の名も亦稲穀の事ホ就て成れる称ホし何
れも天照太神の是物者則顕見蒼生可食而活之也と
詔給へる稲穀の御事ホ〜て後ホ其太神の以吾高天
原所御之齋庭之穂亦當御於吾兒と詔給ひて事依〜
奉給へる天津日継の御爲ホ御父素戔嗚大神の大年

神を今生給ひて此農耕の事に功用を今立給へるか
ら其天津日継と申奉るハ四方國の公民の獻る天
津御食の瑞穂を聞食す御職号を渡らせ給ふが故に
皇御孫尊の大御世継の初年に出来る新穀を天神に
奉らせ給ひ御親も聞食し臣民にも賜ひて大嘗の大
御政を相兼て行はせ給ひ此年を以て大御世の初と
爲させ給へるを以て大歳元年と申す古の定格なる
ハ專此大年神に預る事大嘗祭式悠紀主基両國の齋
郡にて其齋院にも今祭給ふ八座の中の其第一ハ御
年神に御在しを以て明らめ奉る可し其事ハ別に

中臣壽詞講義を著ハして已に述たりき又古の書典
に載られすと雖も今しも諸國一同に年始に家
毎に棚を架て年神とも大年とも神名を称へて何れ
の神よりも重く祭祀り奉るハ此大神に坐て一に見えて
年中の事を祈り年穀の事を願ふ爲に古へ有來る
神國の風儀甚愛なき事なり今世愁ひに物知れる輩
なとい古書に見えさるを訝りて甚端無き事に思
ふめれども凡て天下一般の風と成れる事ハ記さ傳へて
る者なく飢て喰ひ渇きて呑む事の如きハ人毎に日毎
に在る事なるが故に物に書さるに等しく却りて

書典ニ載ざるハ事を外國に求めずして神國の自然
なる太禮なるに心著ざるを甚と愚なる心惑ひと云
者なりける但中古以來西戎の曆策をも學ぶに故
ニ此篇篇などと云僞書の出來りて歳德
神八將神などの妄說世に廣く成りて今ハ神世の故
實を中ニに疑ふに至れるハ味氣無き事なれ然る歳
德大歳などの事を附會すと云も元々皇國に上古
ニ傳ハりて年始に大年神を祀る事などの取て種
と爲るに非ずして如何にしてハ然る强說の出
來る事の有む凡て世人ハ廟を借して冊屋を取れ
たりと云ふ俗語の如くこそ○宇迦之御魂神ハ大年神と同神なる
事上六十ニ九丁に注りが如く傳十三十六丁に注るが如く四神
出生章第六一書に又飢時特生兒号倉稻魂命と有て下
に倉稻魂此云宇介能美拖磨と有る事なれども此ハ

伊弉諾大神の御子にハ非ず古事記に謂ゆる和久産
巢日神此神之子謂豐宇氣毘賣神と有て即其第十
一一書に出たる保食神の御事なるが其神と倉稻魂
命と申す事古々混れたる傳と見えたり大殿祭詞
に屋船豐宇氣姫命と有る下に是稻靈也俗詞宇賀能
美多麻と所見たる其神と稻靈也と云るハ然る事な
がら其神を宇賀能美多麻と注せるハ上の稻靈の字
に泥まれる注の相違なり然るハ其御神の御事ハ
も傳十四二十六丁に注に奉るが如く右に出たる二の御
名の外に大氣津比賣神と申す御名古事記に見えたる豐

宇可乃賣神の御名攝津風土記ふ出又四時祭式鎮魂祭條ふ御膳魂神祈年祭詞ふ大御膳都神大忌祭詞ふ御膳持須留若宇加能賣命神名式ふ大宇加神外宮儀式帳ふ等由氣大神なと見元て此御名の下ふ御魂の言を添て申すハ別ふて此ふ謂ゆる素戔嗚大神の御子宇迦之御魂神是なり然るハ凡て神の御上ふ某神と申すと某魂神と申すとハ動宮と次宮との狀ふ似たり体用の差別有る事ふて天照太神と天照御魂神との如く大國主神と大國魂神との如くして其本神の御功用を幽賛奉りて其御恩頼を受奉り弘もる謂ある事己ふ傳十三十九丁廿一四十

五丁ふ注るが如し但和名抄ふ稲魂和名宇加乃美多万と有ふ就て宇加乃美太万と宇加と万俗云宇加と万の差別有と知れ宇ふて草木の全ふ亘れ宇加と云ハ生と云事と申す方の御名御在し坐べき由己ふ云るを此ふ宇加乃美太万と申すハ豐受大神ふ宇加乃美太万然れハ唱の異ふして字の一もの混れとも云ふ稲穀ふのみ限りて狭き心ちす可し然して二十二社注式稲荷神社條ふ中社倉魂命播百谷神也下略と有ハ然る事ふて右ふ引る大殿祭詞ふ豐宇氣姫命を是稲霊也と注し又私記ふ和名抄ふ日本紀云保食神ふ和名宇加乃美知保稲保持也宇氣者食之義也言是保持食物之神也とも注せるが如く其大神ハ其宇氣を保持せ給ふ元霊神ふ御在し坐せバ其御霊と申奉るのみふして外ふ御事業ハ御在し坐

ざるを別ふ倉稲魂神此ふ出給ひて百穀を播殖させ給ふ事なる故ふ体と用との差別有る事を右ふ云るなり猶其大神ハ〜も衣食住の資と成す可き草木共ふ保持せ給ふ神ふて渡し〜せ給へるを其木の方ふハ五十猛命（とゝ云神別ふ）御在〜坐て大八島國内悉播殖〜て青山と成させ給へるふ同じく御事なり偖此御神の御事ハ上ふも書せる稲荷神社記ふ倉稲魂命を即素戔嗚尊子母大山祇女伊非諾尊子同名云云と云て其上社下社ふ進雄尊大市姫命幷せて三座ふて御在〜坐〜又近江國小津神社注進ふ大宮宇賀魂命二宮素戔嗚尊三宮大市姫命せと有るなど共ふ正〜き傳共ふて古事記の此の古説を徴せる者とゞ云べきなりけり又神名式ふ近江國滋賀郡那波加神社俗ふ苗鹿社と申す是なり社傳ふ那波加社者宇賀御玉神と申すも保食神の方ふハ坐ず此神なる可〜其那波加ハ苗許（なはか）と云事ふて歌詞ふ何處を許（ばか）と云ふ又ハ其許（そこば）と無くなるなど云ふ波加ふて其地を云るれバ本ハ苗代などの事ふ起（同郡ふ神回神社と申すも見元たれバ）なるなどふや右ふ播百谷神也と云らを思ふ可くこゝ偖此神を稲荷神社ふ齋奉りて其最尊きハ傳十五三百五十丁ふ云る東京宗像大神の相殿ふ御在〜坐る此

を始として國こゝ處この津この浦この境近も移り奉りて其遥社の多く御在り坐す事何千万處か御在り坐らむ天下に至れる御恵の廣く遠く御在り坐す御事なむ仰奉るに猶餘り有て所思ゆる又山城國愛宕郡江文神社と申す式外にて舊社御在り坐るを神祇正宗と云に倉稲魂命神也と云も同神と思しきなり古史第十一段徴に此古事記の宇迦之御魂神を誤て削れ又其稲荷の御神を豊宇氣毘賣命と一神として説を云れそれに惑はされて世の愚言の輩なむど伊勢外宮と御同体と思ふは古くも然る混れの有り事に有れども今更に甚其意を得ざる事なり已に注式に引る或記に此神の光翁と化に顕れ給へる事を記せり右は妖僧の妄言なるべくも已に男神にて坐す事を傳へたれば引こゝろ然云るは有けめ其保食神は女神にて坐す物を如何てか老翁と形を變て顕れ坐と云事の有べき

▲○神活須毘神

八に瑞珠盟約章に謂ゆる熊野櫲樟日命に御在り坐て五男神の其一に坐るが其五男と申すも二神は亦名の重復れるにて其實は三男なる中の天穂日命是なる由傳十五（二百四十三丁二百四十八丁二百八十八丁）に委しく論定めたるが如し然るを其第一の一書に熊野忍蹈命第三の一書に熊野忍隅命寶鏡開始章第三の一書に熊野大隅命と申す亦名も御在り坐るに記傳にも引れたる出雲風土記に出雲郡伊努郷郡家正北八里七十二歩國引坐意美豆努命御子赤衾伊努意保須美比古佐倭氣命之社即坐郷中故云伊農（神亀三年改字伊努）と有る此意美豆努

命ハ一も素戔嗚尊い御事なる由條々ふ明らめたるが如くあれば其御子ふ此神の御在り坐す事實ふ相叶へるを見べし故其赤衾ハ伊努ふ係れる發語なり（出雲郡）意保須美い右の熊野大隅命の大隅ふて此ハ伊努の地名ふ係て云て彼ハ意宇郡熊野の地名を添て申せるふて各其住せ給へり處々ふ依て稱別たり者なり此古佐倭氣ハ彦眞別ふて男神の稱なり備古事記ふ神活須毘神之女伊怒比賣と有る伊怒と記傳ふ伊努と訓れたるハ然る言ふて實ふ誤字なる事此ふ知られ又活須毘と櫟樟日と同ドく意保須美と大隅

と同言なる上ハ其同神ふ御在り坐す事更ふ論を待ざる者なりし又上六十九丁ふ引る横須賀神社注進ふ見えたる如く素戔嗚尊大市姫命熊野櫟樟日命三神御在り坐るふも其神ハ一も大年神の后神伊努比賣命の御父ふ坐をいなり又上ふ云る伊勢國小朝熊社ふて櫟玉命大歳神相並坐る其櫟玉命ハ天穗日命の孫ふ當る由傳十五卷二百五十八丁ふ云る如くなれば由有り○伊努比賣の努字を本ふ怒ふ作れるハ誤なり故改めつ（記傳十二三十ふ右ふ擧たる風土記を引て）神名帳ふ出雲郡出雲郡伊努神社同神社魂伊豆乃賣神社同社神魂神社同社比古佐和氣神社有り此伊努郷ふ由れる御名なる可し右の神魂神社ハ神活須毘神ふハ非ぬ故伊怒比賣ハ伊努神社ふてもや有む又帳ふ尾張國山田郡ふも伊奴神社

社有り」と云ひさ此ふ就て考ふるに風土記ふに伊農
社同社同社伊努社同社同社と有て六社ありふ式ふ
に右の如く四社のうち引合て餘の二社に今考ふ可き
うずと雖も其中ふに必此伊努比賣神社也御在ー坐
べきが記傳ふ右の神魂神社と神活須毘神ふ當られ
たるに違へり其神ふ謂ゆる熊野櫲樟日命亦名熊野
大隅命ふ坐て風土記ふ伊努郷國引坐意美豆努(命)御
子命食伊努意保須美比古佐倭氣能命社即坐郷中故
云伊農と有りふ右の伊努神社是なり又其比古佐
和氣神社ふ其別社なり若て其神魂伊豆乃賣神社ハ

其御祖段ふ謂ゆる伊豆能賣神の御事ふして其后神
ふて渡ーせ給ひ又此を神魂神の御子と爲るハ實ふ
ハ伊弉諾大神の成ー給ふ御子ふハ坐せども其御魂
を産靈ばせ御在ー坐す本ふ係て申す事已ふ傳十五十
丁三百六十丁十五二百丁ふ注るが如ー若て同記ふ秋鹿郡
伊農郷郡家正西一十四里二百歩出雲郡伊農郷坐赤
舍伊農意保須美比古佐和氣能命之后天甕津日女命
國巡行坐時至坐此處而詔伊農波夜詔故云伊努神亀三年
改字伊農と有ふ出雲郡伊農郷坐ハ其后神ふ係りて天
甕津日女命ハ其伊努神社神魂伊豆乃賣神社同神た

る事を知る便なる文なり然して伊農波夜と詔給へるハ其夫神の御在（坐出雲郡）伊努の地を慈慕（慕）ハせ給へる御詠言ふて景行天皇四十年御紀ふ所見たる吾嬬者耶の御歎の御詞ふ等しき者なり若し此（其）神魂伊豆乃賣神亦名天甕津日女命ハ即此大年神の后神と成りて給へる伊努比賣命の御祖ふて渡らせ給へる者なり又風土記秋鹿郡未官知社の中ふ伊努社と見えたり右の女神の御社ふ御在（坐）事申すも更なり此ふ就て思寄れるハ尾張風土記ふ丹羽郡吾縵郷品津別皇子生セ歳而不語皇后夢有神告曰吾多具國之神名曰阿麻乃弥加都比女吾未得祝若爲吾充祝人皇子能言亦是壽考と有ハ神名式ふ謂ゆる阿豆良神社是なり山田郡伊奴神社坐凡由有り右の多具國と云ハ出雲風土記ふ（具）島根郡未官知ふ多久社

見（之）元多久川源出郡家西北廿四里小倉山西流入秋鹿郡佐太水海と有り又神名式ふ楯縫郡多久神社風土記ふも多久社と書し多久川源出郡家東北神名樋山西南流入海と見えたれハ此方ふや有らむ秋鹿郡右ハ島根郡在ハ楯縫郡ふて相隣れるハ其多久と共ふ由有る可し偖此伊努比賣命の伊努ハ御父神の伊農共ふ稲生（イナフ）の言の約れるふや有らむ右の尾張國山田郡伊奴神社を本國神名帳ふハ從三位上伊奴天神と有り此を集説ふ在山田莊稲生村按伊勢國奄藝郡伊奈富神社稲生祭神保食神也與此同神と云る保食神の説ハ此さハ異なる事なれども伊奴（イヌ）を稲生（イナフ）と唱ふる甚謂れ有る事ふて殊ふ大年神の后神ふハ實ふ良ハしき御名なりけり又其

ム又神名樋山郡家東北六里一百六十歩高百廿丈五尺圓卅一里一百八十歩憲曰有石神高一丈圓一丈許側潜ふ石神百余許古老傳云阿遲須枳高日子命之后天御梶日女命來坐多久村產給多伎都比古命云々又

御父神の御名ふ負坐るも所以有る事ふて傳十四百二十八丁ふ注るが如く此神の本御名を天穗日命と申す穗日ハ穗飯の義なり其御子大背飯三熊之大人の三熊ハ例の眞稲の義なるゆて四神出生章第十一ハ一書ふ見えたる保食神許ふ遣ー給へる天熊人なるも其神ふ坐せバ此御父子共ふ稲穀の事ふハ止事無き御功坐る神等なり然れば其伊農於保須美と申奉る伊農も共ふ稲生なる事申すも更なり斯る時ハ此伊努比賣命ハ一ハ其大背飯三熊之大人ふも御兄弟ふ御在ー坐し本より然る御功用を備へさせ給ふ可き

其謂ふ有る事ふて此ふ大年神の后神と定ま〳〵せ給へるもと奇異ーき迄ふ契合へる者なりけり偖此神の生坐る御子五神の中ふ向日神御在ー坐と向日神社ふて御年神同体異名と傳へ(社記ふ)向日神者神須佐之男命子大歳神要活須日神之女神須治曜姫命生子也と云ひ神名帳古本書入ふも素戔嗚孫大歳也母須治比女と有と此ふ合するふ此伊努比賣命の外ふ又用香用比賣生子大香山戸臣神次御年神(二柱)と有も向日神御年神同神なる上ハ伊努比賣命香用比賣命同神なる事も亦此を以て知べき者なり偖山城名跡志ふ云

ムカヘ　偖石の栖社ハ香用社と記れるなり可き事向日神尊母也三首を以て知べき者

物ふヒ訓郡栖杜在沃方人家南平林中或書云沃方栖社者所祭向日神尊母也仍向日社例祭前日彼社司來於栖社爲禮典也と所見たる是即其伊弩比賣命亦名香用比賣命ふり御在ーー坐なる可き貫之家集ふ蔭とのく頼む甲斐有と露霜ふ色變わ爲ぬ栖の杜ゝ」と詠ふ年加比を二句ふ藏ーたるも其向日神ふ所縁有を以なり如此く大年神の后神の御事なむ甚慥ふ在て諸書ふ合ふ所有を古史七十四段徵ふ神活須毘神伊弩比賣命を此二名甚思束無」と云ふハ自其見解の及ばざるなり其及ばざるを以て然許り云い甚謂れ無くなむ○生子ハ此ふ大國御魂神次韓神次曾富理神次向日神次聖神の五神有れども其中

ふ大國御魂神ハ此篇六ノ一書ふ亦曰大國玉神と有て亦名なれば此ふハ除く可く韓神次曾富理神ハ大倭神社注進狀ふ傳聞園神者大己貴命之和魂大物主神也韓神者大己貴命以彦名命也と有る如くふて大年神の御子ふ非れば此も必除く可き者なり然れば此ふ殘る所ハ唯向日神聖神二柱のみなれば向日ハ向飯ふる可く聖ハ(田)飯知ふて同德の神と聞ゆれば此ふ大年神の生給へるむ唯一神のみ御在ーー坐ける○大國御魂神の御事ハ此篇六ノ一書ふ出たる大國玉神の下ふ注ーー奉る可ーー記傳十三ノ十丁ふ何神ふ在れ國を

經營り坐し功德有を其國に於て國魂とも大國魂と
も申して拜祀るなり故諸國に某大國御玉神社と云
多し然るに此は何國とも無きは倭の大國御魂神か
り此神は大宍年遲神を助けて倭國を經營り坐し功
德ぐ有けむ若て倭國は天皇命の靜坐す御國と成て
他と異なれば國名をば申さずして唯に大國御魂神
と申し又大倭大神とも申して皇朝の尊崇ミ坐事も
殊に重りけり（傳二十九年十月倭の事と云ふ 四日引ち）
記に（山跡國者往昔 要）古大和國者元山岳也大己貴命以彥名命作堅此
國故云山跡國也（鑿山開谷爲平夷 多而平地少所治天下大定持命要）と有り造るも傳も有て別に國魂神

ム此記に也御大神より意禮爲天國主神亦爲宇都志國玉神と授給へる御名なるべしと

有て經營り給へるに非ずるも有ければ其說は難立
き事なれど己に大倭神社註進狀に舊記曰大倭神社在
大和國山邊郡大倭國（己）蓋出雲杵築大社之別宮也傳聞
倭大國魂神者大己貴神之荒魂與和魂戮力一心經營
天下之地建得大造之績在大倭豐秋津國守國家因以
号曰倭大國魂神亦曰大地主神以八尺瓊爲神体奉齋
焉と書し又別社條に狹井神社在大和國城上郡傳聞狹井神
者大己貴命之荒魂大國魂神即當社別社也と有が如
く大國御魂神と申すは別神にて御在し坐ばれば全
く此に在に誤なる者なる事著明くなるも有けり古史第七

○播磨風土記に者馬郡新羅神社所祭の彦名命園韓神也と云ふ新羅は此の所の四一書に語り韓地なり其韓神と御在し坐す少彦名命と祀れるが上ふ大物主神と共に書神なりとも祀奉れりとの事なり其注進狀

十四段徴ふ云く大國魂神と云ふ大國主神の荒魂の名なりと大年神の子と紛々たるなり其ハ神代紀ふ大國主神の亦名を舉たる所ふ大國玉神と見え古語拾遺ふも其亦名を舉て大國魂神と有り古事記ふハ其亦名を舉たる所ふ幷有五名と云て此御名の無きハ紛れて殊ふ一神と傳たるが故なり云々と云れたるハ實ふ然り說なり猶傳せ九卷ふ云と見て曉れてよ○韓神ハ常ふ園韓神と並べ申す其一神ふて御在し坐す大倭神社註進狀ふ韓神者大己貴命少彦名命也兩神經營天下爲顯見蒼生則定其療病之方と有ハ正し古傳と聞えたり(冥)而ふ或ハ云大己貴命少彦名命神記曰昔造葦原中國訖去往東海今爲濟民更亦來歸因以号兩神云韓神歟古語外國云韓也と注せるハ文德天皇實錄ふ依て後

人の注せる所あるが此御記の撰有し元明天皇御世より百五十年許も後なる事を知て前ふ韓神とハ稱申さる可きふ非ず又外國を凡て韓と云も委しくさる事なれど其ハ各云取りの足ざるふこそ有けれ事の違へるふハ非ざるなり偖此第六一書ふ其後少彦名命行至熊野之御碕遂適於常世鄉矣と有て少彦名命の外國ふ渡坐し事ハ誰しも能知れる事なれば大己貴命の御事ハ諸書ふ考ふる所無きと(右の)其注進狀ふ神代卷曰大己貴命即以平國時所杖之廣矛獻皇孫曰吾以此矛有治功皇孫若用此矛治國者必當平安今我

當於百不足之八十隈將隱去矣言訖即躬被瑞之八坂瓊而長隱常世鄉者矣と有り是今本とハ異ふて常世鄉の三字有れバ此國土を天神御子ふ避奉らせ給ひて外國ふ渡り御在ーせーしーと證ある者あり又注進狀を見るふ式の大和國添上郡寧川坐大神御子神社有て其別社三柱ふ御子社一座と此國韓神社三座と（体原物と引て）あるふ體源物又新井君美が樂考ふ道調の敬手破陣樂一名王皇破陣樂を大神統秋（續紀秋）云古より傳云ふ昔寧川神（治と渡りて）新羅國を破らせ給ひーー形を象とりーあり其面元興寺ふ在て珍ーーき寶ありしふ文治年中ふ燒失す山階寺其顏を寫せーー物有て今又其を寫ーたるを世ふ殘せりと云ふ」と云り此寧川神と申すハ其大神氏家牒ふ大神御子神姫蹈鞴五十鈴命子守御毋三島溝樴姫（耳之女玉櫛姫）狹井神大已貴命荒魂大國魂命と有を大三輪三柱（神鎮座）注進次第ふ奉齋媛蹈鞴五十鈴媛命大物主命也と所見たれバ大物主神も（大國魂神ふ共ふ）渡ーーせ御在ーー坐ーるりけり此ふ幽契有り次ふ云べーー此ふ就て平田翁（氏）の三五本國考と云を著して尊ふ坐ーー人皇氏ハ素戔嗚尊ふ坐と云ハれ五帝の伏羲氏ハ大國主神ふ坐ーして其女媧氏ハ后神ふて須世理毘賣命ふ當られて其余の四帝も我が神眞ある由ふ云ハれ又彼ふ桼一小子又東華大神青童君と云ハ我が必彦名命ふ當られたる悉く確論ふて此翁の生涯の著述ふ此許り愛たきハ非ずふも有けり然れど

△此摩川神社の御事猶傳廿九巻ニ八十一丁ニ注り考合すべし

も中ふハ道士の妖言を信ずして人を惑ハす事ハ〳〵ざれバ其有意〳〵て見る可きあり必大ふ取も捨も爲つ可き傳十九三百八ふも引る神樂歌の韓神ハ三島者ハ十七丁

木綿肩ふ取掛け我韓神の加良袁岐爲むや加良袁岐末ハ拍手を手ふ取持て我韓神の加良袁岐爲むや加良袁岐と有を記傳ふ加良袁岐ハ韓招禱り辨内侍日記ふ建長三年十月十六日新大納言實房夜番ふ參りて云こ何と無き狀ふ韓神を宜き程ふ謡ひ捨て出給ひ〳〵と次將の許より申遣ハして侍けれバ辨内侍聞かバやな倭ふハ非ぬ枯荻の身ふ深む風ハ秋なく〳〵ずと也返て次將内侍倭ふハ非ぬ物ふ枯荻の返す

こも猶ふ忘れぬ体源抄ふ私云加良袁を見元たる加良袁岐ハ實ふ其二神ハ〳〵も外國迄も悉ふ巡作らして皇御孫尊の御奴國と寄せ奉給ふ神ふ御在し坐せるを以て韓神の韓招爲給ふと云古語の有を取て神樂ふハ謡へり〳〵者ありけり其證ハ崇神天皇七年御紀ふ國の不治る事を愁坐て於是天皇乃幸於神淺茅原而會八十萬神以卜問之是時神明憑倭迹〻日百襲姫命曰天皇何憂國之不治也若能敬祭我者必當自平矣天皇問曰教如此者誰神也答曰我是倭國域内所居神名爲大物主神時得神語隨教祭祀然於事無驗天皇

乃沐浴齋戒潔淨殿内而祈之（中略）是夜夢有一貴人對立殿戸自稱大物主神曰（中略）令祭吾者則立平矣亦有海外之國自當歸伏之者有ら此事ふ合て垂仁天皇二年御紀の細書ふ御間城天皇之世額有角人乘一船泊于越國笥飯浦故号其處曰角鹿也問之曰何國人也對曰意富加羅國王之子（中略）傳聞日本國有聖皇以歸化之（下略）ゝ有て韓招爲給ふ其驗の同じ御世の内ふ在りを以て外國を寄奉給へらハ即韓神（この名の起り所以ふ〜て其韓招ゆ）の御所爲ゆる事を曉ら可き者ゆり但右の大物主神の御事ふ〜有れバ殊異ゆりと思ふ人も有ゆめども大三輪（神鎮座）三社（注進次第ふ奥

源氏若菜下巻ふ「昆布白く枯たる荻を高やかふ挿頭して唯一人ゆる裏頭り舞ふ」とゆ記ずゝ百けるこゝを若て古史等年四歟徵ふ大宗拾略記ふ韓神者伊恵命号韓神曾神ゝ者も由ふて平恵命ゆ示名ゝ祖定にゆ信ふ神名式ふ意宇郡小韓國伊太氐神社三所出雲郡ふ三社皆り其上記貴四書ゆ韓地ゆり渡ゆる趣見えたれども正く注進状ふ然り傳の有て它書ふ合れハ予ハ取ざらゆ

○保利

津磐座大物主命中津磐座大己貴命邊津磐座少名彦命ゝ所見たれバ其大己貴少彦名二神の御心ゆゝ為る事を得ずゆむ記傳ふ枯ゆ荻ふ私云加良衰岐ハ試樂執柄家ふて行ふゝ時人長枯たゆ荻の枝を持つ事有ゆり是秘事ゆりと云ひ又内侍所御神樂式ふ韓神之事素盞雄尊子也有帝基安泰之誓故宮中祭之云ゝ加良於幾座置也と云り枯荻座置の説皆僻事ゆり」と云れたゆる實ふ然ゆ事ゆり但其枯ゆる荻を持つハ其歌ふ加良衰岐の言有ふ就て執物の如く爲ゆる可」偖加良と云称ハ神代ふ已ふ韓鄕之島の名有り又（韓地又）此ふ伝ふ意富加羅國の称有て大抵ハ今の朝鮮（八古三韓の地ゆり）の地方を云ゆ弘りて後ふハ海外ゆる諸國ハ一ふ四夷八蠻の差別を立ず該羅（オシクン）めて云称ゝ成れゆハ自然ふ此皇大御

國の物國ふ充實満足ひたるふ對へて空國なる称ふ
ハ甚似著しき事なりけれバ外國の摠号と成れる事
中外を分たる称呼とも云べきなりけり（其ハ傳二十七五十ふ注ると見べし三十ふ注ると見べし）故文德天皇
實録ふ齊衡三年十二月庚午朔戊戌常陸國上言鹿島
郡大洗磯前有神新降初郡民有煮海爲鹽者夜半望海
光耀屬天明日有両怪石見在水次高各尺許体於神造
非人間石鹽私異之去後一日亦有廿餘小石在向石左
右似若侍坐彩色非常或形沙門唯無耳目時神憑人云
我是大奈毋知少比古奈命也昔造此國訖去往東海今
爲濟民更亦來歸と有て神世ふ此二神共ふ常世郷ふ

給ハむ神事ふて云て行けハ也

渡坐しハ韓地ふ始て赤縣あど西蕃の方ふ往坐り
けるふ今此ふ東海ふ歸給ふハ謂ゆる此大地球を
悉くふ巡作坐し御事ハ申すも更なるが其ふ就ても
其外蕃の諸部を臣屬せしめ其方物を貢來らしめて
皇御孫尊の御爲ふ万國の全を寄奉らせ給ふとの御
事ふて國ゝの然開くるふ隨ひて其韓招の御事も
年ふ月ふ大ふ成る事ふて皆此韓神の御心なる事を
なむ知べしけるふ故其大已貴神を生島足島神とも
称奉りて其祈年月次祭詞ふ皇神能敷坐島能八十
島者谷蟆能狭度極鹽沫能留限狭國者廣久峻國者平

久島能八十島墜事無皇神等能依左志奉之見元たるハ
此ふ在る事なり是を以て韓神とゝろハ申奉られ韓
國の神と申す義ふハ非ず韓地の全を也國形ふ作り
固めさせ給ひ各土の方物を貢來らしめ給ひて皇大
御國を足國と爲させ給ふるむ其韓招の由なりける
然れば今ゝ後ふも千万と多き中ゝハ皇大御國
を慕(唯等同ふ思ひて)參來ら也有べく又其本末を辨へざるハ通信交
易の事ふ就て渡來ら也有べく其弥甚ゝ愚(春蛭)なるハ
海中の一島と慢りて窺來ら也有べきが各其狀ふ隨
ひて皇朝ゝ馳め給ハ也道有を可きを其道ふ疎く

て彼が長たる所の炮銃ふ畏れ其巧となる奇器
淫巧ふ目眩き外夷を仰ぐ事天の如く犬戎を敬ふ事
神の如くして天皇の叡慮ふ悖り神祇の所置ふ背く
輩(出來れるむやに其韓神の韓招の爲ふ等族遺さげ)世ふ多りけるい枯荻の散ぎも亡る基なる
可き神功皇后御紀ふ見元たる如く神の御教有て韓
國と伐て令取給ひも家之國として其國ふ府を
置れハ十船の貢を一ふも船腹乾ず奉らしめ給へるハ
一ふ神の御心なりしと以て外夷をして其傷傲を
恣ふ爲しむる事ハ決めて神の御心ふ違奉る事遠き
者なり見よゝ然る俗士の身の成る果ハ終ふ國賊
の名を受て天地史籍ふ記され天地と共ふ其罪の遁
れ盡る世ハ有まじきなり僅ふ半生の富を大ふして天
地ふ容べゝぬ罪人と成り
竟ふハ沒る事なるべゝ(地名あれども未詳)
三十ふ書紀神代巻ふ日向籠衣之高千穂峯漆山此云曾
三丁

○曾富理神ハ記傳十二

褒里能耶麻と見元又神武天皇御巻ふ大和國ふ層富縣有り但此ハ添上下二郡と成れる處と聞ゆれハ嘗布ふる可し和名抄ふ添上曾不乃加美添下曾不乃之毛と有れハ有り偖常ふ園韓神と一ふ連ねて申し習へる故ふ此の曾富理神を即園神なりと誰も思ふ事ふて信ふ然も有ぬ可し採要と云れたる實ふ然り抑其添山と云事ハ其一名を日向襲之高千穂穂日二上峯と云ふ二上峯と云が如くして其二上とハ夫婦の如く両山相重りを云て曾褒里も亦相副ふ義なり若て右の大和國の添上添下ハ古ふ曾富縣と云て御縣神詞ふ高市市葛木十市志貴山邊曾布と有て古大和國六縣の一なり故其名義を按ふふ其大和國ハ曾布なりハ南方高市十市の邊ハしも謂ゆる國の奥區と云べき地ふして此ハ唯其ふ添ふ意なるを以て元ハ曾富理とも云けるなる可し如此考定めて大倭神社注進狀を見るふ上ふも引る添上郡巒川坐大神御子神社三座と有る其別社ふ三枝御子社一座と有て次ふ園韓神社三座傳聞園神者大己貴命之和魂大物主神也略と見元て世ふ名高き園韓神社是なり此ハ神名帳ふハ漏させ給へれども己ふ神祇令ふも三枝祭義解ふ謂巒川社祭也

と有る程の事なりけれバ古ふハ其三社共ふ殊ふ隆
御在ーー坐て中ふも件園韓神社ハ諸國ふ多在るも當
社を以て本と爲る故ふ世ふ名高くて其添の地名を
以て称奉れりけむが混れて此ふ大年神の御子とハ
傳ハれるなりけり但同神ふてハ坐せども園神と申
すハ其義異なり次ふ云を見て知べし記傳ふ曾冨理
別神ふても有むう其故ハ若此曾冨理神なるバ韓神
の御字ふ坐せバ韓園と先と爲るう旦彼ハ園とのみ何れ
次て其祭礼も園と先と爲るう事無く又曾能と曾冨
の書ふも見えて曾冨理と云う事無く又曾能と曾冨
理と言の通ふ曲も無れバなり上云へと云れたるハ上
ふ曾冨理を地名なりどふや有むと云迄ハ考られたれ
ども未園の義を得らねばりーと見ゆる上件曾冨理
説るれバ此一事ふ於てハ盡されずなむ

ハ地名を以て神ふ称奉れるなり若て園神の御事ハ
傳十二六十六丁ふも組注せるが右ふ引る注進狀傳聞園
神者大己貴命之和魂大物主神也と有る下ふ此神園
華飛散之時發疫病守護之鎮止之仍云園神歟園殖草
木之處也集解所謂三枝和靈祭云當社之事と注せる
ハ神祇令鎮華祭義解を取て言を換たるのみにて注
者の意らとも見ゆれども亦據有て云る者なりけり
古事記水垣宮段ふ此天皇之御世疫病多起人民死爲
盡ふ天皇愁歎而坐神牀之夜大物主大神顯於御夢曰
是者我之御心故以意冨多多泥古而令祭我御前者神

氣不起國安平（中略）即以意富多泥古命爲神主而於御
諸山拜祭意富美和之大神（前略）因此而役氣悉止國家
安平也と有り此事を御紀ハ七年春二月と書されて李春ハ亘
たりれバ其ゝ始れる事なりふ神祇令ハ季春鎮華
祭有り四時祭式ハ三月祭鎮華祭二座大神社一座
三枝祭（狭井社）三座（率川社）と有て共ハ相合へりと大神と（狭井）繹川
と両社ハ（狭井）て被祭る由なり若て其鎮華祭義解ハ謂大
神狭井二祭也在春華飛散之時疫神分散而行攘爲其
鎮遏必有此祭故曰鎮華と有て此ハハ率川ハ無ゝ
て狭井と出たるハ其狭井神を率川社ハ合祀れる事

上九十丁ハ云る如くなるバ大神と率川と両社ハ就て
其鎮火（華）祭ハ被行るとなり集解ハ釋云大神狭井二處
祭大神者祝部請取神祇官幣帛祭之狭井者大神之鹿
御靈也此祭之華散之時ニ神共散而行疫已爲止此疫
祭之也と有り此ハ合せて神令（亦）李夏三枝祭義解ハ謂
繹川社祭也と有を集解ハ此云鹿靈和魂祭と注せれ
ハ繹川社ハも大神大和の二神の御在ーー坐す事知べ
ーー然れバ右の義解ハ春華飛散之時と有を注進狀ハ
園華鬼散之時と換たるも此園韓神の御在ーー坐す本
社ハ坐神ハ然る由緒の御在ーー坐ハ就て注せる者な

れバ大物主神と丶ゝ圓神と申奉るなり然る謂れハ
依れる事と所見たりけり其ハ纒川神社を三枝華を以て祀るゝ故ハ三枝神
と申す神名と成れるか如し但右の集解の文ハ三枝華散
之時二神共散而行疫已爲四疫上此疫と云文ハ混
ハしくて二神の疫を行給ふなれども此ハ然
ふ非ず春華の飛散る頃間ハ疫神の分散して其疫の
を行ふ事有を大神狹井の二神共ハ分散して疫瘡
行るゝと悉くハ止る事と成給ふと云義なる心を
著て見る可し○圓韓神の御事ハ何處ふとも合せ祭る事ハ
て其一神と異ふ別たれざる事なり其大倭神社注進
狀ハ圓神ハ大己貴命之和魂大物主神也と見え韓神
ハ大己貴命以彦名命也と有て總て三柱ハ坐なが此
三神を合せし大神神社ハ祭る所と等しきハ右ふ云

りし如く崇神天皇御世ふ始りて其神社ハ起れる事
と所見たり大三輪神三社鎭座次第ハ奥津磐座大物
主命中津磐座大己貴命邊津磐座少彦名命と有と圓
韓神三座と其所祭等しく相合ると見て其然る所以
を知ら曉る可しりけり故此神を國ふて齋奉れる
社の多き中ふ最名高きハ右の大和國添上郡纒川神
社の別社ふ御在し坐る是ふて諸國ふ在ゆる圓韓神
社の本社なる事其地名をさへふ御名ふ負せ奉るを
以て著き事なり然るふ昔ゝ官帳ふも收給ハず神
階の次第ふも及ハれたる事無きハ鎭華三枝の二祭

共ふ其本と有る大神狭井の二社ふて被行るゝが爲
なる可く又綜川社ふても其大物主神の御霊を主さ
祀られて園韓神ふ疫癘有る上ふ不比等ふたりて其ところの御霊とび の爲ふ別ふ祭別なるふこと
有けれ本ハ同ト綜川の社ふて有しるバ殊更なる祀典の事ハ
朝廷より沙汰ふハ及ばれざりしふも有べし但注進狀ふい
大神氏家牒曰養老年中藤史亦建園韓神社奉齋焉と
有れバ其始なる如く見ゆれども其ハ其本社ふ坐を
別ふ祭別なるふて本社始より無き事の此ふ始れる
なる如ク證ハ其以前ふ書されたる古事記ふ曾冨理神
と有い添と地名なるを以て考ふ可し然れバ別處ふ
り此ハ元移奉れるゝと見ゆも強事ふハ非る可くなるも有
ける神名式ふ云く宮内省坐神三座並名神大園神社韓
神社二座記傳十二四丁文徳天皇實録ふ齋御元年三月癸亥園韓神並加從三位ふ
儀式ふ園神在南韓神在北

△春用春祭後世冬勅當祭前丑

△之有れバ其より以前ふ已ふ神階の御事有しるゝけり清和六皇
實録ふ貞觀元年正月廿七日甲申春授宮内省從三位園神
韓神並正三位之有り臨時祭式ふ凡園韓神西社謚岐國
封土調庸祖系者送納此官充修社
料之有と此ハ當旨と見奉る可し四時
祭式二月祭ふ園韓神三座祭料座五云石香二月冬
十一月丑日祭ふ春用

△参議以上一人就祭所行之其内侍到來乃始祭之之有り

其立机先南後北と有て年毎の二月と十一月との丑
日園韓神祭として行はせ給ふ又神樂ふ韓神歌有り後
拾遺集ふ資良朝臣藏人ふて侍ける時園韓神の祭の
内侍ふ催すとて禊すれど験無ければ園韓神ふ祈り
もと云て侍ける返事ふ詠る少將内侍近きだふ聞ぬ
禊を何ら其韓神迄ハ遠く祈らむ抑此二神を如此崇
祭給ふ由縁ハ江次第頭書ふ園韓神口傳云件神延暦
以前坐此遷都之時造宮使欲奉遷彼所神託宣云猶座
此處奉護帝王云云仍鎮座宮内省と見ゆ此由古事談
ふも有り百練抄ふ大治二年二月十四日園韓神社神

祇官八神殿八丈内外院門垣等焼亡園神韓神御正体奉
取出之但後日兼俊宿祢云八神園韓神自元無御正体
但園韓神有神寶歟桙云云と見え又長秋記ふ大治四
年三月廿一日己亥参院仰曰去夜本院御夢想有老人
称宮内省住人申云近日居住雑人等乱入甚難堪也此
事可令訪給也今朝被尋之處彼園并韓神二社入夢驚
申歟件社焼亡後未突四面垣仍雑人等乱入あるも有
う（採要補意）と云れたるか如く神威甚神こゝき御社ふるむ
御在しに坐ける其後ふゝ園大暦ふ文和四年十一月十
九日天陰園韓神祭社壇顛倒其後無沙汰五節同日無

沙汰中原康富記ふ應永廿六年二月五日大風園韓神
御社顛倒と見り柳園韓神ハしも右の如く帝王を護（奉）
らせ給ふ可き御託の御在しに坐し鎮り給へりふ焼亡
の御事顛倒の御事ふどの然御在しに坐けるハ即帝基
の衰へさせ御在しに坐て天下ハ乱れふ乱れ行て終ふ
ハ其御社ハ跡だふ知られず成果（給へ）たるあむ甚き歎り
ハしこき御事ありけり韓神の韓招ふ依て古ハ蕃國と
召給ひて我朝廷より馭め給へり外夷ふも頸根突く
世と降り果たるを見るふも甚偲ハしこきハ古昔ふあ
む然許り神の御守ハ御在しに坐ざりふや近年墨夷の
押て参渡り来しより以降天行不正の神氣や世ふ

△東ハ

行ハらむ年ニふ疫病の流行りて有けるを去年の秋ハ急劇しき痢病の行はれて危江戸より西ハ長崎へ四方ふ弘ごりて其爲ふ不平こ亡る人幾許と云數を知ず甚痛ましき事もありけるふ此安政六年と成て春始より時疫の行りいを去年と云ひ今年と云ひ未皇國ふハ聞も知ぬ病共の渡來りて可惜公民を惱ませりこう甚口惜き事ありけれ此ハ彼犬戎の礼無きを罰め亡ぶし給ふ世ふ當りて其神風ふて吹拂ふふ非れバ世ふ盡まじき事とう此ふ亞てハ山城國心有る輩ハ秋ふふ云合りける

愛宕郡今宮有り其事ハ傳十二六ヶ二丁ふ註せり其外園韓神の御在ー坐す社ハ數知ず多在るふ民部省圖帳ふ攝津國石井莊廣田大神神貢二百五十束神靈以彦名命蛭兒以右両神爲二座相殿大己貴命園韓神也と有る此ハ神名式ふ謂ゆる武庫郡廣田神社名神大月次相嘗新

▽伊勢風土記ふ負郷郡井上神社孝謙天皇四年所祭園韓神少彦名神也土地有疫疫則たゝ又更遷江風土記ふ名神也と見ゆ

▽摂津國風土記ふ住吉郡廣田神社名神也と見ゆ

▽又伊勢風土記ふ負郷郡井上神社孝謙天皇四年所祭園韓神少彦名神也土地有疫疫則たゝ又更遷江風土記ふ名神也と見ゆ

▽同風土記ふ住吉郡廣田神社名神也と見ゆ

▽又武藏風土記ふ住吉郡樟田神社所祭園韓神少彦名命也任旅ふ天皇十年之勅而始行神礼有神家巫戸祈病災皆不驗祈田莫不實又盤井神社敏達天皇十二年災己ミ月所祭大己貴命也云ミと有て両社相並び又亦次ぎ壯小六天神所祭大己貴與少彦名熟神也ニふ小比木也貴命少彦名命を合て韓神ふ申事ハ御在ー坐す

當ニ有る此御社の御事ふて天照太神の荒魂を荒夷神ニ申奉りて其主神ふ御在ー坐す事ふて次彦名命蛭兒ふど云ハ僻事ふれども此ハ神功皇后御紀ふ所見たるが如く其征韓の御時ふ顕出させ御在ー坐けるふ御神ふ坐せハ其相殿ふ御在ー坐す事其謂れ有り但二十二社注式ふハ住吉廣田八幡南宮八祖神と有り園韓神の御名を載ざるハ後ふ祭加へられたるふ也▽又薦河風土記ふ島渡郡加美島或神島加美志麻之祠稚足彦天皇五年己亥五月被奉官幣以彦園韓神之二神祭ニ有ハ成務天皇御世の事ふ有り當昔己ふ園韓

○偖神名式ハ謂ゆる上野國勢多郡赤城神社名神大とは上野國志ニ云ふ柳ノ前ニ示ス大ニ貴命ニ云ふ記ノ前ニ示ス天木尊ハ神ハ古大臣上野の勢多の赤城山ハ赤社日本ハ何で阿ー女ー むこ有ハ神社と略して神社と訓ける。けり今赤城三所ノ神と申す國幣神の三神と合せ祀る編と見えたり傳ロ九百五十三ー三十三ー三十巻六十三ーふもこべー

神を諸國ふても被祀る事ハ有ーなりけり。○向日神ハ古事記ふ白日ふ作れり記傳十二三十五丁ふ白字ハ向の誤ふて年加比なる可ー其故ハ式ふ山城國と訓郡向神社大歳神社と並載れり此向神社ハ大年神御子向日神を祀ると云ふ何れの説も同ト けれバなり其大年神の御子ふ向日神と云ハ何れの古書ふも見えぬ事なるふ然云ハ中ニふ古き傳なる事著明ー偖此社ふ神位を授奉りぬー事三代實録ふ貞觀元年正月廿七日甲申奉授山城國正六位上向神從五位下と見ゆ今も向日明神と申ー其處を向日神と云ふ今ハ年

加布と唱れども古ハ年加比なりー事日字を添て書るふても知べー中務内侍ふ日記ふ向日明神近き程ふて常ふ參ると云ーが馴ーくて馴ーむ心を知らハ行先を年加比の神の如何見るらむと有り其頃迄も年加比と唱へーなり此内侍ハ弘安正應の頃の人なりと有ふて白ハ向字の誤なる事著明ければ今改めつ然るハ當社ふ掲たる古額ふ正一位向日大明神と國ふ書ー太秦廣隆寺縁起ふも山城郡乙訓郡有ー辛社殿号乙訓社今向日明神也と見えたり頭注又古本書ふ素戔嗚孫大歳子也母須治比女と有り又正七ー十ー伊怒比賣命の

（大倭神社注進状ニ引ク新國史ニ寛平九年冬十二月壬申朔甲辰奉授五畿七道諸神三百四十座各位一階ト有リ其中ニ〻しかハ此時ニ従二位ニ叙ス）

下ニ引ク栢杜の社傳ニ所祭向日神尊母也と有るゝ共ニ向日神なる可き證共なり但其額と相傳へてハ野道風朝臣の筆と云り如何ハも古筆なれ共ハ然も思ゆる物〻〻朝臣の世ニ在し頃ハ未従五位下なりし御事なれバ其後の御紀ニハ漏されたるハや國大曽ニ所見なる天下諸神増一階の例を以推すニ天慶三年従五位上なり永保元年正(四)五位下なり永治元年正五位上なり治承四年従四位上なり建仁元年正四位下なり元暦二年従四位上なり建治元年従三位なり永徳元年正三位なれバ其より後ハ正一位ニ進ませ給へるなる可し然れども其書体甚古雅なるを以て思ふニ右の負觀より後ニ直ニ進階の御事御在し坐しを傳へ漏されたるなり

儲向日神社記ニ向日神者神須佐男命子大歳神娶須佐須日神之女神須治曜姫命生子也此神國作堅之後可鎮座國覓之時登此峰謂八尋長尾岬哉朝日之直刺地夕日之照地天離向津日山吾覓地覓地也永鎮坐於是國神名加豆野戸邊菅野連等遠祖也進御田即於此山下之下津石根宮柱太敷於高天原此水高知殿奉仕而朝夕奉仕焉と所見なる是甚く古き傳と所思しくて奇珍らかなる事なむ有けり此須佐須日神ハ上八十三丁ニ注せらるゝ如く此記ニ謂ゆる神須佐須毘神ニして即御紀の熊野櫟樟日命是なり神須治曜姫命ハ右ニ引る頭注及古本書入ニ母須治姫此女と云る是なり神名式ニ山城國綴喜郡朱智神社丹波國船井郡酒治志神社和名抄郷名船井郡須知と有を思ふニ右

ハ酒治此女神社を誤れるる可ー曜姫命ハ此下ハ
又要香用比賣生子大香山戸臣神次御年神二柱と有る
此女神の御事なる由下百　ふ云を見て知べー此を
以て伊努比賣命香用比賣命ハ別神ふ非ら事を知り
社傳ふ向日神大御年神ハ同神と云說の信有らを曉ら
ふ足れり此神國作堅之後とハ此向日神も大國主神
と共ふ國作給ひなど爲させけむを以云るる可ー八
尋亨長尾岬哉ハ此向日の山續きハ今も西國と云て
長き國の南の端方れて其の尾岬なる地是の謂なり朝日之直刺國夕日之日照國
とハ此長尾ハー也ら南ふ細く出張て東西ハ平坦ふ

ーて打開け山甚遠きを以てなり天離向津日山ハ上
の二句の意を兼て天日ふ親ー〳〵常ふ向ふ山と称美
給へらなり加豆野戸邊菖野連等遠祖也ハ未考得ず姓氏録左京神
別天神ふ菖野連饒速日命六世孫伊香我色乎命之後
也と見え天孫本紀ふも饒速日命十五世孫物部奈西
連公菖野連等祖押甲大連之子と有り偖此向日神の
國作堅坐て其住べき國と求給へらハ神代の昔なる
事申すも更なり其神代ふ神武天皇御世ふ係て御
在ー坐ーハ饒速日命宇摩志麻治命二柱ふ外ふ御
在ー坐ざれハ別神と聞ゆ
猶外ふ必求ら道有るへや故此向日神と申奉ら名義
ハ向飯ふて食向を倒反ーて云ふ語と聞ゆめり其例
ハ先大倭本記ふ一鏡及子鈴者天皇御食津神朝夕之
食向夜護日護齋奉大神今巻向穴師宮所坐拜奉大神

也と有り食向是なり出雲風土記に島根郡朝酌郷郡
家正南一十八里八十四歩熊野大神命詔朝御饌勘養
夕御饌勘養五贄組之處定給故云勘養朝酌と見え祈
年水分神詞に皇神等能依志奉年奥津御年乎八束穂
能伊加志穂に寄志奉者云云皇御孫命能朝御食夕御
食能加年加比に長御食能遠御食登赤丹穂に聞食と有
を鈴屋大人説に加年加比の加は宇加の宇を省けり
ふて食なり年加比は万葉の歌に御食向と詠る向ふ
て神に物を手向と云も同言なり年久流は今向かて
奉る方より云詞年加布は其を受給ふ方より云詞な

ればは加年加比は食向ふて御膳に著給ふを云なり」と
注されたり万葉二三十二丁に御食向木綿之宮乎六十八丁に
御食向淡路乃島二又四十六丁御食向味原宮者九十二丁に
御食向南淵山之と有は向字より竝とも栗とも味と
も蹙とも續けるなり此を以て向日神は向飯神なる
事を曉る可し偖飯は伊比なるを切めて比とのみ云
は神功皇后十三年御紀に角鹿笥飯大神の御名出た
る其を古事記には故亦称其御名号御食津大神と書
され其社記には保食神と云ふ是なり若て飯と云時
は已に炊きたるを云称のみの如く見ゆれども和名

秋郷名ハ相模國足柄下郡飯田讃岐國香川郡飯田香多と有ハ稲田と云むが如くして出雲風土記ハ楯縫郡玖潭郷郡家正西五里二百歩所造天下大神命天御飯田之御倉將造給並負巡行給ふ時波夜佐雨久多美乃山詔給之故云忽実神亀三年改字玖潭と有り天御飯田是なり此等を合せ思ふハ向日神ハ一も御年の事を掌り御在して坐て其禾穀を守護給ひ天下の蒼生をして食ふ著しめ給ふ御功半り謂是なり然れば同下一神ハて八渡らせ給へれども御年神と申奉りハ禾穀ハ就き向日神と称奉りハ食物の事ハ依て負給へり御名ハ

して傳廿三三百二十四丁ハ説奉ハ如く其御祖父素戔嗚大神をして楯御氣野命と称奉りて奇御氣主と申す御功を負持して天下ハ幸給ひ百姓を恵給ふ神ハ坐れば必縁なるぬ御事ハ古史第七十四段徴ハ白日神聖神此名も何とや韓めさて上なる大国御魂神韓神曾富理神を大年神の御子と申す事の信難きハ思合せて疑ハしと云れたれども其韓神曾富理神を五十猛神の亦名と定られたる事の僻事なるハ合せて八子ハ此二神の御爲ハ悪憤らざ事を得ず○聖神ハ飯領神の義なり記傳十二三十六ハ聖ハ借字ハて是も地名ハもや有む式ハ和泉國和泉郡聖神社有り此神を祀れるなる可し此社を三代實録ハ貞觀元年五月七日壬戌和泉國聖神列於官

社同八月十三日丙申授和泉國従五位下聖神従四位下と見ゆ」と云ひたれば偖此聖字を比自理と訓む事ふて神武天皇前紀ふ皇祖皇考乃神乃聖と有て神と聖とを對へ其己未年ふ夫大人立制義必隨時苟有利民何妨聖造と有て此ふ大人を訓て聖字易ふ對へ垂仁天皇九十九年御紀ふ是常世之國則神仙秘區と有て下ふ然頼聖帝之神靈と書て神仙と聖帝と相對へたり此等ハ唯尊ミ崇すへ云ふて虚辞の類なると仁徳天皇十年御紀ふ故於今称聖帝也と有ハ西蕃ふて王者徳を賞称て云ふて古義ふ非ず仁明天皇御紀ふ四十

の寶等を奉賀ふ長歌有り其句中ふ瓢葛乃天照國乃日宮乃聖之御子曾と有ハ右等と ハ別ふて天照國ハ上天の事なり日宮ハ其御在所を申すなり聖之御子ハ日神の御子と申奉ち御事ふて天神御子と申さむが如し斯ればハ日知とハ天日を所知者と申す御事ふて天照太神ふ限奉れる御名なる事己ふ傳ハ五十ふ二丁ふ云り若て万葉一十六ふ玉手次畝火之山乃橿原乃日知之御世從と有ハ神武天皇の御事を申奉れるが此ハ右の故於今称聖帝也とハ別ふて御世ことの天皇等ハ日神の御子ふ(ハ)御在し坐すが故ふ日之御子と

称奉ち〻同じ意操あり中にも殊に崇敬ひ奉りて實
の天日神の如く申成し奉れるあり然るに彼ふて聖
賢と云者の有しと云事を所知者てゝ以降其に正
しく當べき語に無き故に此方にて崇詞に常云ふ日
知の言と畏惶の語とを假ふ當て文字と訓む目標に
に爲しれにれども甚迂遠き事あり〻偖此の聖神
に其訓を假て書れたるかゝる有けれ神皇の御事に
申奉ち日知の意にも非ず又唯其語を借用ひて崇云
ふ聖にも非ず君の大年神の御子と申し向日神の次
に並坐に心を用ふる時に此自理に飯知又飯領の義

に下百三十二に注る
が如く大和にての御
事なるべきなれども其
事の此にも傳はら
て後に号けたる
地名なるに

にて禾穀を主り田地を領給ふ神なる事更に疑無き
可き者なり〻出雲風土記に出雲郡郡家西北九里二百
四十歩所造天下大神御子和加布都努志命天地初判
之後天御領田之長供奉坐之即彼神坐郷中故云三太
三神亀三年
政字美談と所見たる領是なり偖此聖神社本國神
名帳に正一位信田聖宮と有て世に名高き信太森
是なり和名抄郷名に和泉郡信太臣と見ゆ信太は篠
〻古語拾遺に大地主神の田を營りて御饗に唯〻て還り給ひ御
歳神の御子其田に至りて御饗に唯〻て還り給ひ御
父御歳神に申給ひければ御怒坐〻て瞋を放たせ給
ひけるに苗葉忽枯損似篠竹と云る此故事は此に在
小謂名なれ非〻俗に信田の稲荷社と申して山
城國なるに異なるざる由なるも一の所縁なるに上

七十六丁ふ云ふかゝ如く神名式ふ和泉郡大歳神社坐大鳥
ふ同郡大鳥美波比神社ハ庭火神ふて此ふ謂ゆる
庭津日神庭高津日神是なり又和泉郡積川神社五座
の中ふ阿須波神波比岐神坐ふど此聖神社を合せて
共ふ此の大年神の御子神等なるふ思合す可し又記
傳大戸比賣神の下ふ和名抄河内國河内郡ふ大戸郷
有り古河内和泉一國なれば由有ふ聞ゆ云々
と思合す可し偖此聖神社の信田ふ正一位聖大明
神と云額有と或人云ふ和泉志ふ信太大明神信太森
余按此森應明神鎮座記大本朝称森槃此神と云ふ

○香用比賣ハ上八十七丁百三丁ふ引ち向日神社記ふ向日
神者神須佐男命大歳神要活須日神之女神須治曜姫
命生子也と有を此記ふ引合せ見ちふ故其大年神要
神活須毘神之女伊努比賣生子向日神と有り又頭注
及神名式書入向神社條ふ素戔嗚孫大歳子也母須治

比女と有て大年神大歳神同じく神活須毘神活須日
神同じく神須治曜姫命須治比女と同じく有る中ふ
其向日神を古事記ふハ伊努比賣命の生給へる由ふ
ちを社說ふハ神須治曜姫命と云ち違有り然れども
其生給へち御子向日神ふ異無きハ伊努比賣命香用
比賣命一神ふ御在ー坐ふ故なり此ふ又要とハ有れ
ども伊努比賣命ふ其御父を書ーて此ふ何神の御子
とも無きハ全く一神なりを其亦名を以て別神と傳
ハり混れたるふ故なり記傳十二三十六丁ふ香用比賣
の香ハ加賀と訓べし舊事紀ふ賀用姫と書くハ非なり若くハ後ふ
香字を此二音の假字ふ用ひた

ふ加字を脱せる有べし

る例ハ孝元天皇御巻の伊香色謎命を此記ふハ伊迦賀色許賣命と有り崇神天皇御巻の伊香色雄命を此記ふハ伊迦賀色許男命と有り又香山香坂王などの香字も音を用ひたるゆて加具加碁の假字と爲ル是等あり名義ハ容貌の美麗しきを称美て光耀くを云意ハ万葉六ニ十ふ石隠加我欲布珠弁寸一ニ十六丁ふ燈之陰ふ蚊蛾欲布虚蟬之妹蛾咲狀思面影ふ所見此等耀やくを香用布と詠り様と云れたるハ然り事ふて殊ふ社記ふ曜姫命と書せるハ猶更ふ源語桐壺巻ふ其容貌の美麗しきを称美ふ曜やく日の宮と

（宮の御貌ふ猶匂ハしさハ譬へも方無く美くしげなる世の人光君聞ゆ藤壺並び給ひて御覧えも取こえ

（源氏の君の事ふ世ふ類ひ無しと見奉り給ひ名高く御在するに

（最の香具夜姫の事又ハ

申すと云ふ有るなど同じ意味なる御名なるかこゝ字鏡ふ曜耀同弋弋年反去照也光明也ふ也豆久己毛利又加久須又氏良須と有て其初の訓詳ならずふ也ハ洲起元章字ニ一書ふ姸哉此云二向那而惠夜と有り姸字の義なる可し豆久ハ宇祇豆玖なるを云ふ豆久なり己毛利ハ其姸なる所の容貌の美麗しきを云ふなるの隠れる義ふて云ふなるかや偖此ふ香用比賣と有を社記ふハ上ふ神須治と冠ふらせ奉り又別ふ須治比女と申すを以見れば其も亦名の例なるなりけり然るふ須治の義詳ならず故強て思ふふ須治ハ其御祖父素戔嗚大神の御名を由有て蒙ふり負給へるふハ非るふや其ハ神名式ふ攝津國住吉郡草津大歳神社鍬敢神須年地神社鍬敢相並び御在しふ坐るふ其神須年

（問ふ

地神社ハ傳世三三百三十丁ふ注せちが如く所祭素戔嗚大神ふ御在ー坐ちを其郷名の住道も此神社ふ就て起れるふて須年地ハ進貴神須年地ハ神進貴の義なるを其須年地の言の約りて須治と云ふ有る可き事此ふ其夫神大歳神社の草津ふ御在ー坐を以て曉る可ー此ふ隣れる和泉國ふ大歳神を始とりて其御子神等の數處ふ鎮まり御在ー坐ふも思合す可くるも備上ふも引ち神名式ふ山城國綴喜郡朱智神社坐ハ此神須治曜姫命なるふや又丹波國船井郡酒治志神社を今本ふ佐加知志と訓れども義を成ず和名抄郷

名ふ同郡須知と見元神名帳書入ふ須治此女と有を合せて思ふふ右の志字ハ此女の二字を一字ふ誤れちふて酒治此女神社なる可くさう所思れ又和名抄ふ伊賀國名張郡周知有り但此ハ古事記浮宮段ふ師木津日子命之子二王坐一子孫者伊賀之須知之稲置之祖と有れバ此神ふハ由無き地名なるふや備上ハ十七丁ふも引ち山城名跡志ふ訓郡栢杜を所祭向日神尊母也と所見ふ此神を祀れる事著ー但栢ハ加閑なれども本ハ香用社なりけむを終ふ其唱を失いて本名こハ思ひなりぬるふこう但貫之集ふ蔭と

ムラむらと思ひしりぬるも此ハ編纂遠日命ふ係れる

おりけり其由ハ下ふ出ー

うの事なりけム

○生子大香山戸臣神次御年神二柱

と有る此大香山戸臣神ハ此次ふ香山戸臣命神と申す異腹ふ在り其次ふ羽山戸神と申す有れども其ハ

異腹ふて同名なる可き謂れ無れバ此ハ相紊れるなり

一此ふ思出たる事有り

滅歴上記ふ賀茂建角身命坂井波國鎮野神伺伊可古倍

云ふと有り伊可古倍

此の香用ふ近ことと貝神野ハ神名式海波國桑田郡神野神社米上郡神野神社有と讃岐國三十四社考ふ那河郡家村神野神社と傳ふ素戔嗚日命也杵神野神と有ふ以て其伊可古倍

南日女命ハ天穂日命の

地神社ハ傳世三三百三十丁ふ注せるが如く所祭素戔嗚大神ふ御在ー坐らを其郷名の住道も此神社ふ就て起るふて須牟地ハ進貴神須牟地ハ神進貴の義ふらを其須牟地の言の約りて須治と云ふ可き事此ふ其夫神大歳神社の草津ふ御在ー坐を以て曉ら可ー此ふ隣れる和泉國ふ大歳神を始として其御子神等の數處ふ鎮り御在ー坐ふも思合す可くるも偖上ふも引ら神名式ふ山城國綴喜郡朱智神社坐ハ此神須治曜姫命なるふや又丹波國船井郡酒治志神社を今本ふ佐加知志と訓れども義を成ず和名抄郷

名ふ同郡須知と見え神名帳書入ふ須治此女と有を合せて思ふふ右の志字ハ此女の二字を一字ふ誤れらふて酒治此女神社なる可くさら所思れ又和名抄ふ伊賀國名張郡周知有り但此ハ古事記浮宮殿ふ師木津日子命之子二王坐一子孫者伊賀之須知之稲置之祖と有れば此神ふハ由無き地名なるふや偖上ハ十七丁ふも引ら山城名跡志ふも訓郡柏杜を所祭向日神尊母也と所見ば此神を祀れる事著ー但柏ハ加閑なれども本ハ香用社なりけりを終ふ其唱を失ひて本名こハ思ひなりぬるふこら但貫之集ふ蔭とのミ頼む詮有て露霜ふ色變り爲ぬ柏の社ら」と有を以見れば甚古き時ら事なりけり○生子大香山戸臣神次御年神二柱と有ら此大香山戸臣神ハ此次ふ香山戸臣命神と申す異腹ふ在り其次ふ羽山戸神と申す有れども其ハ

此御年神ハ御在ー坐べ～其御子ハ若年神と申す有
を以て記と爲べきなり此を以て見る時ハ次ハ又要
天知迦流美豆比賣と有る其后神の傳の誤なる事知
るしあり大年神の后神古事記ハ載る所凡て三神ハ
れども上件伊怒比賣命香用比賣命ハ同神異名なり
けれバ唯此一柱御在ー坐すの～なり又此の御子等
ハも各論有れバ二柱とも云難き事なり心得て有ル
む○大香山戸臣神ハ次ハ要天知迦流美豆比賣生子
香山戸臣神次羽山戸神と有る此二神も共ハ同神ハ
りつらむを別神の如く傳ハれるハ其后神ハ異なる

傳の有て其ならの混ぬと聞えて甚疑ハしき事ハ
り其上御腹の異なるハ同ト功用の神等の成坐らと
云理ハ絶て無き筈の事なるハ心を著て考ふるハ右
の三神ハ共ハ一柱なて御在ー坐る者なりけり其大
香山戸臣神と申す大ハ美称なり香ハ御祖香用比賣
命の曜なて次なる羽山戸神の羽ハ映ハ同ト山戸ハ
山區の切なるハて國の秀なる地を云ふ臣ハ大身ハ
ハて神の御德の殊ハ大ハ御在ー坐す謂なるハ君臣
の臣字を借て書れさるハこそ有けれ本より其意ハ
なるハ非る事云も更なり然れども山戸と續けて山區

の義ありと云ハ予が説ふハ非す先師の恩賜ゐり其
國号考ふ倭（夜麻登と云名）の義を三ふ説けたる其一ふ夜麻の山ふ
ち事ハ論無し登ハ都冨の約りたるふて山都冨ゐる
可し都ハ例の助辞冨ハ（字ハ假字ゆて）摠て物ふ包まれ隠りたる處
を云ふ古言ゐり然れば是又山の巡れるを以て負ち
名ゐり其由を委しく云むふハ應神天皇の葛野を望
坐て詠せ給へり大御歌ふ知（十葉）婆能加豆（葛野）怒袁美禮婆（百足）
ニ知陀流夜（弥庭）迩波毋美（見）由久ふ能冨毋美（秀見）由と有ハ葛野
の邊ハ今の平安京の地ふれば山の周りて包まれた
中ふ在て山代國の奥區ゐるを以て國の冨と宣へる

国立公文書館
National Archives of Japan